

ライブラリィ と や ま

手放すものと残すもの

富山県立図書館長 中崎 圭子

断捨離が大好きです。

管理職として勤務した高校では、先生方や生徒たちに「良い言葉が良い人生をつくる」「見える景色が自分の人生をつくる」などのメッセージをおくって、言葉や環境整備の大切さを伝えてきました。

すっきり整えた館長室で、思考の断捨離もしながら、当館のあり方などに思いを巡らせる毎日ですが、5月は歴史などの研究をされている方々がお見えになり、館長室でお話する機会が多くありました。皆さん共通していたのが、「蔵の整理などで、価値がわからない人たちによって貴重な資料が処分されることが多く、残念だ」という話題でした。まさにそのころ、私は十年近く空き家になっていた、夫の実家の蔵の整理に奔走しているところでした。立て続けに同じような言葉を耳にし、これは「蔵の整理は慎重に！」というメッセージかもしれないと、その後は徒に断捨離に走らず、夫と義妹とともに、ご先祖様のことを思いながら整理を進めました。「蔵の整理は圭子さんに任せます。掘り出し物もあるでしょう」という遺言書の言葉。古文書などは出てきませんでしたが、義母の言う掘り出し物は、蔵の整理を通してさらに強まった、家族の絆のことだったのかもしれない。

さて、富山県立図書館は「保存のための図書館」を運営方針の一つにしており、来館される方々から「ここは宝の山だ」という言葉をたくさんいただいています。

4月、赴任してすぐに私が借りた本は、ジョン・R・チュニス作、『TVAの少年』です。昭和24年発行のその本は、テネシー川流域開発公社（TVA）に関する物語です。多目的ダムの建設のために農村の土地が買収され、それに反対する農民たち、また主人公の父のようにダムで働く者の姿、やがてTVAのおかげで農業が機械化されていく様子などが描かれています。

私の父が中学生だった昭和25年。魚津の山村の学校には、戦争が終わって何年たっても本らしきものはありませんでした。その年、村に初

めて、小さな巡回文庫（移動図書館）がやってきます。農作業の手伝いが忙しく、父が少し遅れて行ったときには、本は1冊しか残っていませんでした。それが『TVAの少年』です。活字に飢えていた父は、次の巡回まで何回も何回もその本を読みました。実際に父が読んだその本は今も当館にあります。あのとき魚津にやってきた巡回文庫は、昭和25年にお目見えした第1号「みずほ」だったのではないかと、当館にある古いアルバムをめくりながら思いました。70年以上も前のことです。



古い書物や資料から歴史をひもといていく研究者の方々のお手伝いをしたり、県民の皆さん一人ひとりの人生に寄り添ったり、県立図書館としての使命を果たしながら、時には、これまでの考え方などを勇気をもって手放すこともしていきたい。

手放す勇気、残すべきものを受け入れる寛容さ、そしてこの二つを見分ける叡知を私に与え給え、と祈り願う今日この頃です。

(顔写真は北日本新聞社提供)

巻頭写真で振り返る『ライブラリとやま』

当館館報『ライブラリとやま』は、平成3（1991）年に第1号が刊行され、このたび創刊100号を迎えました。その中からほんの一部、巻頭特集写真とともにその歩みを振り返ります。



創刊号（平成3（1991）年6月）：巻頭／脚下照顧

この前年に県立図書館が創立50周年を迎え、県立図書館を広くアピールするとともに当館の活動の記録を残す広報誌としてスタートした『ライブラリとやま』。その創刊を飾ったのは今なお変わらぬ正面玄関の写真でした。巻頭言「脚下照顧」は「足元を見つめ、己の日常を反省せよ」という戒めの禅語です。



第4号（平成4（1992）年3月）：

巻頭／前庭にモニュメント「日本海」

今も県立図書館正面で皆様をお出迎える日本海の像はこの年にお披露目となりました。



第29号（平成10（1998）年7月）：巻頭／社会の変化に対応する図書館

リニューアルオープン直前、別館建築工事の様子を映した貴重な写真です。建築中の別館が奥に見えています。

第37、39、81、95、99号：『書庫にある資料にふれる』

資料の作品背景などを解説する特集。全100号のうち16回巻頭を飾った当館館報を代表する連載です。



★企画展示・イベントの紹介 当館は、皆様と本との＜出会い＞をサポートします！

【令和4（2022）年度に入り実施したもの】

- ・海を渡る子どもの本〈4/19～5/15〉
- ・図書館周辺の自然を愉しむ〈5/17～6/12〉
（関連行事として）植物観察会〈6/1〉
- ・男女共同参画週間から考える〈6/21～7/3〉
- ・高峰譲吉没後100年〈7/5～7/24〉
- ・今日の1冊、月替わり絵本展示

【夏休み行事のご案内】

- ◎展示「がんばろう！自由研究2022」〈7/12～8/28〉
- ◎なつのおはなし会〈8/4、8/6〉
- ◎親子図書館見学ツアー〈7/28、8/8〉

※詳しくは、当館ホームページ、Twitterをご覧ください。
ご来館、お待ちしております。

人物調べ 虎の巻 ～富山藩士・加賀藩士 編～

図書館の窓口には、郷土の人物について関心をお持ちの方から「どの資料を見ればいいのか？」という質問が寄せられます。そこで今回は、江戸時代の人物の中でも、侍（藩士）を調べるための資料をご案内します。人名索引がある資料は、藩士を一覧することもでき、大変便利です。

富山藩士を調べるには…

富山藩には、延宝4（1676）年の時点で、約7,700人の武士がおり、家老・年寄・足軽頭・小姓組・馬廻組など、さまざまな役職に就いていました。

『富山藩侍帳（越中資料集成1）』

高瀬保／編 近世文書を読む会／解説（桂書房 1987）

原本は、当館や金沢市立玉川図書館「加越能文庫」などに残された12種の富山藩侍帳です。慶長10（1605）年から、明治2（1869）年までの年代の侍帳が1冊にまとめられています。

富山藩に仕えた侍について、所属組別に、地位役職・扶持俸禄などを記載しています。延べ8,019名について調べることができます。（人名索引あり）

『富山藩士由緒書（越中資料集成2）』

新田二郎／編 読史会／解説（桂書房 1988）

当館に所蔵する原本『富山旧藩士由緒書』（5巻）を活字化し、1冊に収録したものです。

689の家の由緒が掲載され、天保9（1838）年時点で当時在籍した全藩士の名とその先祖代々の略歴を調べることができます。（人名索引あり）

加賀藩士を調べるには…

江戸時代、加賀藩領だった地域の人物については、こちらをご覧ください。

『諸頭系譜』上・下、別冊（索引編）

金沢市立玉川図書館近世史料館／編刊（2013-2015）

加賀藩の役職ごとに記録されており、藩政期全体の藩士の異動が確認できます。（人名索引あり）

『諸士系譜』1-6

石川県史調査委員会・石川県立図書館史料編さん室／編 石川県／刊（2008-2014）

約600の家が収録されています。藩士それぞれの石高・役職・就任年月日・享年が記されています。（人名索引あり）

『加賀藩初期の侍帳 復刻版』

太田敬太郎／編・校・解説 石川県図書館協会／刊（1970）

天正から寛文までの9種の侍帳を合巻したものです。

『加賀藩侍帳』上・下

金沢市立玉川図書館近世史料館／編刊（2017-2019）

上巻は寛文から文政期まで、下巻は弘化から明治初年までの侍帳を掲載しています。（人名索引あり）

お気軽に おたずねください レファレンス事例集

Q 江戸時代に剣術“天真白井流”の達人として活躍した白井亨^{とある}について調べている。その兵法の記録を残した富山藩士の吉田有恒^{てんしん}についても知りたい。

A 「天真白井流兵法」は、幕末の剣術流派の一つです。開祖の白井義謙（亨）は、天明3（1783）年生まれ、天保14（1843）年没、享年61歳でした。

白井は剣術の達人として、江戸を中心に、関西、中国地方でも活躍しました。中でも、岡山藩では7年間、師範として厚遇され、高い評判を得ました。“天真白井流”（のちに「天真兵法」）といわれる独特の剣術理論を築きました。勝海舟は、談話集『氷川清話』の中で、白井亨という剣道の達人にたびたび教えを受けたことを述べ、「おれも是非この境涯に達せんと必死に練磨したれど、たうとう達しなかった」と、感嘆の念を表しています。

江戸で白井の許に入門した一人に、富山藩士・吉田奥丞（有恒）がいました。吉田は剣術を学ぶだけでなく、白井に願ひ出て、多くの著

書や伝書類を借り受け、それらを筆写しました。『富山藩侍帳』では「吉田奥丞」が剣術師範役の職にあったとの記録が残っています。

当館には、吉田が筆写した「天真伝白井流兵法真剣遣方」「兵法未知志留辺」などが残されています。デジタル化されているので、当館ホームページ「古絵図貴重書ギャラリー」から、キーワード“白井義謙”で検索して、ご覧いただけます。

参考文献

- ・『富山藩侍帳』越中資料集成1 高瀬保／編 近世文書を読む会／解説 桂書房 1987
- ・『剣の精神誌 無住心剣術の系譜と思想』増補改訂（ちくま学芸文庫）甲野善紀／著 筑摩書房 2009
- ・『神技の系譜 武術稀人列伝』甲野善紀／著 日貿出版社 2015
- ・『氷川清話』勝海舟／〔原著〕江藤淳／著 講談社 1974

ふるさと文学講演会 (6/21)
 とやまの風土と俳句 ~ 「辛夷」百周年~
 講師：俳句雑誌「辛夷」主宰 中坪 達哉 先生

郷土にゆかりの文学作品や作家の魅力を紹介するふるさと文学講演会（富山県読書会連絡協議会との共催）が当館で開催され、県内各地から52名の参加がありました。

俳句雑誌「辛夷」は、大正13年に創刊され、再来年に百周年を迎えます。金沢で創刊されたにもかかわらず、八尾のコブシの花から誌名が採用されたといった当時のお話は興味深いものでした。そして「辛夷」初代主宰である前田普羅。風土に依って句作するという、「地貌」論を紹介いただきました。普羅の、富山市の中心部から立山を仰ぎ見た句「立山のかぶさる町や水を打つ」は「水を打つという人間の小さな営みと山岳の大きさの対比が溶け合っている」句です。平成27年に現在の天皇陛下が皇太子でいらした頃、国際連合本部「水と災害に関する特別会合」でご講演なされた際に引用されたそうです。また、昭和20年代に福光に疎開していた棟方志功は普羅と交流があり、『定本普羅

句集』の序文を書きました。志功は「辛夷」の同人になっており、辛夷福光支部を発足させたりもしたそうです。

「辛夷」の二代目主宰である中坪^{きょうし}杏子は県立図書館にゆかりがあります。当館構内に立つ「夏山や地獄を抱きて紺青に」の句碑についても講演で触れられました。さらには、講師ご自身の句作への思いや向き合い方を示され、句作は一人ひとりの人生を豊かにするものでなくてはならないという言葉でお話を結ばれました。質疑応答でも、次々に寄せられる季語や句作についての質問に丁寧に
 お答えくださり、楽しく心に残る講演会となりました。



講演される中坪先生

新着読書会テキスト

1タイトルを10冊セットで貸出します。
 グループでの読書会にご利用ください。

- ・玉岡かおる 著 「帆神：北前船を馳せた男・工業松右衛門」(新潮社)
 ~新田次郎文学賞受賞~
- ・江國 香織 著 「ひとりでカラカサさしてゆく」(新潮社)
- ・浅田 次郎 著 「母の待つ里」(新潮社)
- ・朝井まかて 著 「ポタニカ」(祥伝社)
- ・ヤマザキマリ 著 「ムスコ物語」(幻冬舎)

- ・戸田奈津子、村瀬実恵子 著 「枯れてこそ美しく」(集英社)
- 《県民カレッジ叢書》
- ・米原 寛 述 「富山人の『こころ文化』」(富山県生涯学習カレッジ)

<お問い合わせ先>
 富山県立図書館 普及課
 Tel.076-436-0229



休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
 館内整理日 毎月第4木曜日(祝日の場合は翌日)、5月10日
 蔵書点検期間(11月29日~12月8日)
 年末年始(12月28日~1月4日)

開館時間 火~金曜日(ただし、休館日を除く)午前9時~午後7時
 土日・祝日(ただし、休館日を除く)午前9時~午後5時

貸出 1人10冊まで、15日間

交通機関 富山駅前発バス(3番乗場)
 ・高岡、小杉方面行バス 呉羽山公園下車徒歩5分
 ・北代循環、新港東口行バス 県立図書館前下車

*資料のお問い合わせは、調査課へ
 TEL(076)436-6812

*富山県立図書館
 ホームページ



*Twitterで、当館の最新情報を発信しています。併せてご覧ください。

令和4年度 雑誌スポンサー募集中

詳しくは総務課まで、お問い合わせください。
 ホームページでも案内しています。
 TEL 076-436-0178